

地球のなかまたち

part II

ボスは誰？



photo by toyosa



「さて、諸君。集まってもらったのは他にもない。ボスを決めたいと思う」

シロフクロウは厳かな声で言いました。

「一番賢い私がボスには相応しいと思うが、遠慮なく意見を聞かせてもらいたい」

シロフクロウは、自分が一番頭が良いと思っています。

「我々は団結して、ここでの生活を改善していかねばならない。この点について、オオコノハズク君はどう思うね？」



「ボスを決める？　今のままで充分だと思うが」

オオコノハズクは少し驚いたように答えました。

「ボスを決めて何をしたいのだ？　生活改善とはなんだ？」

オオコノハズクは続けます。

「それにシロフクロウ君が一番相応しいとも思えん。ボスになるなら、わしじゃ」



「おお、オオコノハズク君は私を推薦してくれるのか。いつでも引き受けるぞ」

オオワシはその凜とした顔を上げました。

「確かに私がボスになるのが最善かもしれない」

オオワシはうんうんと頷いています。

「違う違う」オオコノハズクは慌てました。

「相応しいのはわしじゃ、わし」

「分かっている。私だろう？」オオワシはしたり顔で頷きました。



メガネフクロウが横から口を挟みました。

「何を言っているんだ。ボスには私になろう。この大きな目で皆を見渡せるからな」

メガネフクロウは、目をぐるりと回して皆を見ました。

「誰も異議はないだろうな？」

メガネフクロウの眉は白くて立派です。

だから、反対なんて誰もしないと、メガネフクロウは自信たっぷりでした。



「目が大きいとボスになれるの？」

アフリカオオコノハズクが、大きい目をもっと大きくして聞きました。

「だったら、ぼくが一番じゃないかな」

確かにアフリカオオコノハズクの目は大きくてまん丸です。

「でも、ボスってなに？」

アフリカオオコノハズクは首を傾げました。



双子のフクロウは声を合わせて叫びました。

「ボスって何？」

「ボスって何？」

「目が大きいとなれる」

「目が大きいとなれる」

「ぼく達は目が小さい」

「ぼく達は目が小さい」

「生活改善」

「生活改善」



「何をくだらないことを言っているんだ」

ノスリがあきれたように天を仰ぎました。

「鷹の仲間の私こそがボスになるべきだ」

ノスリは続けます。

「私は空高く飛ぶことも、地面すれすれまで降りて獲物を捕まえることも出来る」

そしてフンと鼻を鳴らしました。

「目ばかりギョロギョロと大きくても、夜しか見えないのでは役に立つ筈がない。ボスになる資格はないぞ」



「ボスって、何でもしてくれるわけね？」

今まで黙っていたメンフクロウが声をだしました。

「だったら、この私の羽、なんとかしてくれない？ 曲がっちゃって直らないの」

メンフクロウは悲しげに自分の羽を見ました。

「ボスはまだ決まってはいない」 ノスリはやれやれというように首を振りました。

「だったら外にいる仲間にも聞いて、はやいところ決めましょう。わたしも羽を直してもらいたいし」

事の成り行きに呆然としているシロフクロウは動くことができません。

ノスリは仕方なさそうに外に出て行きました。



外に出たノスリはまずエミューに聞きました。

「ボスには誰が良いと思う？ もちろん私に一票入れるだろう？」

「イッピョウ、イッピョウ」エミューは叫びました。

「ありがとう、私に一票だね」

「イッピョウ、イッピョウ、ワタシニイッピョウ」と言いながら、エミューはポンポンと太鼓をならすような音を出しました。

「ポンポン、イッピョウ。ポンポン、イッピョウ」

どうやら、イッピョウが気に入ったようです。



イッピーウ、イッピーウと叫んでいるエミューを残して、ノスリはコガネメキシコインコのカップルに話しかけました。

「きみ達は、私がボス・・・」とノスリが言いかけると、インコがその言葉を遮るように言いました。

「ぼく達、今いいところなんだ。話しかけないでくれる？」

「そうよ、気が利かないわね。見て分からないの？」

ノスリは赤面して退散しました。



それを見ていたベンガルワシミミズクは「フフフフ」と笑いました。

「恋人達の邪魔をするんじゃないよ。彼らは愛を囁くのに忙しいんだから」

ノスリはまたまた赤くなりました。

「君は、かわいこちゃんより、ブスがいいのかい？」

ノスリはブスではなく、ボスを探しているのだと訂正する気にもなれません。

ミミズクは訳知り顔でノスリにウィンクをしました。



「ぼくはハンサムだから君の役にはたたないなあ」

インドクジャクは申し訳なさそうに言いました。

「ブスのボスを探しているんだって？ 難しい注文だね」

ノスリはクジャクに事情を一生懸命説明しました。

でも、クジャクは自分の美しい羽を手入れするのに余念がありません。

「幸運を祈るよ。ボスが見つかるといいね」

クジャクは大きく羽を広げて去っていきました。



「俺のボスに会いたいんだって？」

オニオオハシが声をかけてきました。

「ボスはアマゾンの星といわれるくらい綺麗なんだぜ。嘴だって俺のよりずっと大きいしよ」

ノスリは説明するのも億劫になってきました。

黙っているとオニオオハシが気の毒そうに言いました。

「残念だったな。俺のボスは今南アメリカにいる。合わせてやりたいんだが」

ノスリは答える気力も失いました。



ノスリは地面に降り立ちました。

鳩が草むらで休んでいるのを見て、話を聞いてもらおうと思ったのです。

ところが鳩は話を聞くと、ノスリを睨んで言いました。

「私たちには関係ないことですよ。私達は自由なんです。ボスなんていません」

「そうそう、ボスなんてまっぴら。そっちで勝手にやってちょうだい」

ノスリはすごすごと引き返しました。



「何してるんだい？」

かわいい声がします。

ヨウムです。姿に似合わず小鳥がさえずるような声を出します。

「まいったよ」ノスリは疲れ果てた声を出しました。

「クククク」とヨウムが笑います。

「ボスになろうなんてことが間違いなんだよ。ここの連中にボスがなんたるかを理解させるのは不可能と言うものだ」

全くだとノスリも思いました。

「ねぐらへ帰るとするか」ノスリは疲れた頭と体を休めたいと思いました。



部屋の中ではシロフクロウがノスリの帰りを待っています。

「私がボスになることにみんな賛成のはずだ」

シロフクロウはひとりでぶつぶつと言っています。

「団結だ、生活の改善だ」

他の鳥は家に帰ってしまいました。

それでもシロフクロウはまだ頑張っています。

「私がボスだ、団結だ」

今日もまだ呟いているのかもしれませんが。

おわり